

教育委員会と連携した学び続ける教員の基礎・基盤を構築する

初任者研修支援プログラムの開発に関する継続的研究

研究代表者	鈴木由美子（学習開発学講座）
研究分担者	井上 弥（学習開発学講座）
	宮里 智恵（学習開発学講座）
	伊藤 圭子（初等カリキュラム開発講座）
	山崎 敬人（初等カリキュラム開発講座）
	米沢 崇（学習開発学講座）
	中村 和世（初等カリキュラム開発講座）
	松浦 武人（初等カリキュラム開発講座）
	佐々木哲夫（教育学講座）
	大里 剛（教育実践総合センター）
	西本 正頼（教育実践総合センター）
	中井 悠加（学習開発学講座）

I 研究の背景と目的

本研究の目的は、初任者と指導教員を支え、「学び続ける教員」の基礎・基盤を構築する小学校初任者研修支援プログラムを開発することである。

2012年8月の中央教育審議会答申において、「学び続ける教員」を支援するため、大学の知を活用した現職研修の充実を図る仕組みを構築することなどが提言されている。また、教員の大量退職による新規教員採用者の増加に伴い、初任者の資質能力を初任者研修によって形成していくことが従来以上に求められている。

そのような中、広島大学では、平成25-26年度の期間で、独立行政法人教員研修センターの大学委託事業の採択を受け、広島県教育委員会と連携・協働して、学び続ける教員の基礎・基盤を構築する初任者研修支援プログラムを開発し、学外から高い評価を得た（広島大学，2015；米沢他，2015）。そこで本研究では、上記で開発した初任者研修支援プログラムの内、継続的に取り組んでいる次の2つについて報告する。1つ目は連携・協働型初任者研修プログラムとして実施した「グループ別教育実践研究」における取り組みである。2つ目は、初任者と指導教員を支援するためのツールとして開発した初任者用「実践的指導力向上ハンドブック」および指導教員用「初任者支援ハンドブック」の運用である。これらについて考察することで、より質の高い初任者研修支援プログラムの確立に寄与する知見を得ることを目的とする。

（鈴木由美子*・伊藤圭子・中村和世）

II 初任者研修支援プログラム

1. グループ別教育実践研究

「グループ別教育実践研究」は、広島県立教育センターで実施されている初任者研修のうち、初任者がグループを編成し、教材研究から授業実施（模擬授業）までの授業づくりの過程の演習・協議を行うものである。そこで、大学教員と指導主事が連携・協働して初任者らに対して理論的・実践的な指導・助言を実施した。この取り組みを通じて、初任者が様々な教育課題に対する自身の考えを深化させ、理論と実践の往還を図るとともに、自らの実践を省察し、自らの実践的指導力、とりわけ授業力を向上させることを目指した。詳細については米沢他（2016）を参照されたい。以下では、平成27年度「グループ別教育実践研究」の実施内容について詳述する。

（1）受講対象者

平成27年度広島県新規採用者（小学校）136名であった。1グループが10-11名で構成され、計12グループが編成された。

（2）指導体制

指導体制はチーム・ティーチング形式で行った。各グループに、広島大学の大学教員と広島県立教育センターの指導主事を1名ずつ配置し、指導・助言を行った。

（3）各回の概要

平成27年度より広島県立教育センターで行われる初任者研修が火曜日と水曜日に分かれて行われることになった。それに伴い、グループ別教育実践研究は年間4回となり、上述の12グループが火曜日と水曜日（各6グループ）に分かれて実施されている。各回においては、初任者が、模擬授業で使用するようになった教科書教材や学習指導要領解説、指導・評価・教材研究に関する諸資料などを使いながら、主体的にグループ協議を進めた。

グループ別教育実践研究①（6月16日/17日）：オリエンテーションを行い、グループごとに年間を通じた研究テーマ、教科・領域、各模擬授業で扱う2つの単元、題材、授業者を決定した。大学教員は、初任者が抱える悩みや課題に共感し、グループによる授業研究の楽しさや醍醐味、授業研究の進め方のポイント（特に評価の視点）を伝えた。指導主事は教科・教材の選考・決定に関わる指導・助言を行った。

グループ別教育実践研究②（8月18日（合同開催））：1回目の模擬授業（以下「模擬授業Ⅰ」）および2回目の模擬授業（以下「模擬授業Ⅱ」）の学習指導案を持ち寄り、それらを検討する中で模擬授業Ⅰ・Ⅱの学習指導案を作成した。ただし、模擬授業Ⅱの学習指導案については、模擬授業Ⅰの成果と課題を反映させてグループ別実践研究③において修正した。指導主事は模擬授業Ⅰ・Ⅱの学習指導案作成に係わる指導・助言を行い、大学教員は模擬授業Ⅰ・Ⅱの授業展開等をグループで共有することの重要性を伝えた。

グループ別教育実践研究③（12月8日/9日）：模擬授業Ⅰを45分間で実施した。その後、映像や写真の記録をもとに、テーマを観点としながら初任者・指導主事・大学教員が一緒になって授業の振り返り・事後協議を行った。指導主事はタブレット端末によって模擬授業Ⅰの様子を写真撮影し、振り返り・事後協議における助言・指導を行った。大学教員は模擬授業Ⅰをビデオカメラで撮影し、振り返り・事後協議において、初任者が授業改善をしようとしていることへの肯定的な評価とフィードバックを行った。

さらに、協議の内容を踏まえ、初任者が模擬授業Ⅱの学習指導案の修正について協議した。指導主事は模擬授業Ⅱの学習指導案作成に係わる指導・助言を行い、大学教員は模擬授業Ⅱの授業展開等をグループで共有することの重要性を伝えた。

グループ別教育実践研究④（2月9日/10日）：③と同様の形式で模擬授業Ⅱおよび振り返りを行った。そこでは、指導主事と大学教員は、模擬授業Ⅰと比べてどのような改善や成長が見られたかということを中心にフィードバックを行った。

さらに初任者は、1年間のグループ別教育実践研究を振り返り、グループ別教育実践研究で学んだことの交流を行った。具体的には、グループ毎にグループ別教育実践研究で学んだことを模造紙にまとめ、他のグループの前でその模造紙をもとに自分たちの学びを発表した。指導主事は模擬授業Ⅰ・Ⅱを振り返り、グループ毎のまとめを行った。大学教員はグループ別教育実践研究を通して初任者が成長した点についてフィードバックを行った。

（宮里智恵*・松浦武人*）

（4）オブザーバーの視点から見た所感

平成27年度のグループ別教育実践研究には、校長経験者である大学教員2名がオブザーバーとして参加した。所感は以下の通りである。

1）初任者の経験年数による学びの違い

経験年数の多寡は、語彙数において端的に表れる。小学生の語彙数が高校生のそれと比較し、少ないことは極めて常識的なことである。語彙数の多寡は、状況説明の広さと深さを規定している。つまり、グループ別教育実践研究にオブザーバーとして参加し、最も痛感したことが、新規学卒グループと経験者グループの協議中の語彙数の相違である。

「発問」「授業展開」「評価」等々どのグループにおいても熱心な協議が行われていたが、経験者グループでの「発問」という一つの語彙に基づく協議には、自ずとそれまでに蓄積された、子供の実態や教材のねらい等を含意した「適時性」や「効果性」を意識したものが随所に見られ、協議に、広さと深さが感じられた。

一方、新規学卒グループにおいては、熱心さは感じられるものの、広さや深さはなかなか感じられなかった。しかし、このことは、極めて当然である。一つでも吸収しようとする熱意やエネルギーをひしひしと感じた。回を重ねるごとに彼等の語彙数、語彙力が確実に高まっていることを感じた。

経験者においては、それぞれの学校における即戦力として活躍してほしい。また、新規学卒者においては、3年を一つの目途として力を蓄えてほしいと切に願うものである。

2）グループ別教育実践研究の意義

初任者が、これまで大学等で学び習得した理論知と、初めて学校に赴任し教壇に立つての実践知がうまくかみ合わず、七転八倒するのは古今東西相も変らぬものである。そうした中、年間4回にわたる本グループ別教育実践研究において、授業づくりを中心に同じ悩みを持つ初任者同士が喧々諤々、理論と実践の往還をしつつ共同で新たな知を創造し、キャリアアップしていく雄姿は壮観である。

また、主体的な学びを担保できる本講座は従前から初任者の評価が高く、今後「学び続ける教員」として、長い教職生活を支える基盤づくりに資する上で意義深いと考える。中でもファシリテーターである、実践に基づく指導方法を主眼とする教育センター指導主事

と指導内容、教材の価値付けを主眼とする本学教員の協働による時宜を得た示唆に富んだ指導、助言は初任者に好評であり、初任者の学び、成長に大きく寄与していると捉えている。今日、現職教員の研修に係り、中教審答申等において大学と行政との連携の具体的な在り方が模索される中、本講座における指導主事及び大学教員の協働による指導体制は、今後の教職研修の趨勢を見据えた一方途と言える。

(西本正頼*・佐々木哲夫*)

2. 初任者用・指導教員用ハンドブックの運用

(1) 初任者用ハンドブックの概要

初任者用「実践的指導力向上ハンドブック」は、初任者の実践的指導力の向上を目指しており、次のような内容で構成され、平成26・27年度の初任者研修にて配付・運用している。詳細については広島大学(2015)・鈴木他(2016)を参照されたい。

① 授業力スタンダードと初任者研修マップ

授業づくりに関する基礎的な知識・技能を身に付けるための「授業力スタンダード・ルーブリック」を用いて、初任者が自分自身の授業力の到達度を確認できるようになっている。また、「初任者研修マップ」も参照し、受講する研修内容が授業力のどの領域と関連が深いのか確認し、自身の課題の明確化や意欲の喚起に活用できるようになっている。

② 初任者研修の手引

初任者に配布される「初任者研修の手引」等を挟み、初任者研修の年間スケジュールを確認できるようになっている。

③ 研修内容振り返りシート

各学期始めにおいて自身の授業力向上を目指した目標を書き、その学期末には自身で立てた目標を振り返ることができる「学期ごとの振り返り」シートが設けられている。さらに、初任者研修の資料も学期ごとに蓄積できるようになっている。

④ 授業映像等(DVD)

初任者研修における模擬授業の録画映像等をDVD等に記録し、付属のポケットに蓄積できるようになっている。また、自身の所属校で撮影した授業の映像等があれば、それも蓄積できるようになっている。

(2) 指導教員用ハンドブックの概要

本ハンドブックには、授業力を構成する8つの領域(「学習規律」、「実態の把握」、「教材研究」、「授業の分析・評価」、「学習指導案」、「発問」、「板書」、「机間指導」)ごとに、初任者の授業力を向上させる上での指導・助言のポイント等を記載している。

具体的には、各領域に係わる目的や内容などの初任者に伝えるべき基礎的・基本的な事項だけではなく、それらを初任者に助言する際のポイントや留意点が記されている。さらに、大学教員や先輩指導教員からの「ひと言アドバイス」やおすすめの本・資料の情報も含まれている。詳細については、広島大学(2015)・鈴木他(2016)を参照されたい。

(3) モニタリング調査

初任者用ハンドブックおよび指導教員用ハンドブックの内容改善や効果的な活用方法に

関する具体的な情報を得るために、本研究では初任者と指導教員を対象として、モニタリング調査を実施した。

- ① 実施時期：1回目は2015年8月3日、4日、6日に実施した。2回目は2016年2月2日、3日、8日に実施した。
- ② 調査協力者：平成27年度の初任者研修受講者（初任者）3名、および指導教員3名であった。
- ③ 実施方法：調査者2名が各学校を訪問し、上記3組計6名の協力者にインタビューを実施した。具体的には、調査者2名が各ペアに対して、約40分程度のインタビューを実施し、ICレコーダーで録音した。
- ④ 調査項目：調査では、以下の調査項目についてインタビューを実施した。

○初任者に対するインタビュー項目

- ・ 初任者用実践的指導力向上ハンドブックをどのように利用したのか
- ・ 初任者用実践的指導力向上ハンドブックを利用したことによる効果
- ・ 指導教員との振り返りの際に、授業カスタンダード・ルーブリックをどのように利用したのか
- ・ 指導教員との振り返りの際に、授業カスタンダード・ルーブリックを利用したことによる効果

○指導教員に対するインタビュー項目

- ・ 初任者支援ハンドブックをどのように利用したのか
- ・ 初任者支援ハンドブックを利用したことによる効果
- ・ 初任者を指導する際に、授業カスタンダード・ルーブリックをどのように利用したのか
- ・ 初任者を指導する際に、授業カスタンダード・ルーブリックを利用したことによる効果

- ⑤ 調査結果：モニタリング調査の結果を踏まえると、実践的指導力向上ハンドブックは初任者研修の資料の整理や学びの蓄積に役立っていた。今後は、ハンドブックを活用した振り返りを促す方法について検討していきたい。

初任者支援ハンドブックについては、初任者を指導・助言する上での有用な知識を提供していること、指導教員としてのこれまでの経験の裏付けとなっていること、初めて指導教員を経験する者の不安を解消する一助となっていることが明らかとなった。

(米沢 崇*・大里 剛*・中井悠加*)

Ⅲ 研究の成果と今後の課題

本研究では、2つの取り組みについて報告した。以下では得られた知見を要約し、まとめとしたい。

(1) グループ別教育実践研究について

グループ別教育実践研究では、教育委員会・教育センター・大学の三者が連携・協働することで、初任者が授業力を中心とした様々な教育課題について理論と実践を行き来しな

がら実践的指導力を向上させることに効果を持つということが分かった。その際、新卒の初任者と経験者の学びの違いが明らかとなったため、今後はその点も考慮した取り組みを考案していきたい。

(2) 初任者用・指導教員用ハンドブックについて

初任者用ハンドブックが、初任者研修の資料の整理と学びの蓄積に役立っていること、指導教員用ハンドブックが、初任者を指導・助言する上での一助となっていることが明らかになった。本研究を通じて得られた情報をもとにハンドブックの有用な使い方を考案していきたい。

2015年12月の中央教育審議会「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申)」において、初任者研修の改革の必要性が指摘されている。このことから、本研究を継続的に行い、初任者の資質能力の形成を支援していきたい。

(鈴木由美子*・井上 弥・山崎敬人)

引用文献

- 広島大学(2015). 学び続ける教員の基礎・基盤を構築する初任者研修支援プログラムの開発—教育委員会・学校・大学で初任者を支えることを目指して—平成25-26年度独立行政法人教員研修センター委託事業「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」成果報告書.
- 米沢崇・幸坂健太郎・竹谷浩子・鈴木由美子・井上弥・伊藤圭子・山崎敬人・中村和世・永田忠道(2015). 学び続ける教員の基礎・基盤を構築する初任者研修支援プログラムの開発—教育委員会・学校・大学で初任者を支えることを目指して—日本教育大学協会研究年報, 33, 189-200.
- 鈴木由美子・米沢崇・中井悠加・大里剛・西本正頼・佐々木哲夫・幸坂健太郎・久保研二・宮木秀雄(2016). 初任者用実践的指導力向上ハンドブックと指導教員用初任者支援ハンドブックの開発と運用(1)—学び続ける教員の基礎・基盤の構築を目指して—学校教育実践学研究, 22, 印刷中.
- 米沢崇・中井悠加・鈴木由美子・幸坂健太郎・宮木秀雄・久保研二(2016). 大学と教育委員会による連携・協働型初任者研修プログラムの開発 学習開発学研究, 9, 125-132.